

第20回 約束の賜物を受ける条件は忍耐です

第10章②⑥節から③⑨節 奨励と勧告(2)

- ②⑥もし、私たちが真理の知識を受けた後にも、故意に罪を犯し続けるとすれば、罪のためのいけにえは、もはや残っていません。
- ②⑦ただ残っているのは、審判と敵対する者たちを焼き尽くす激しい火とを、恐れつつ待つことだけです。
- ②⑧モーセの律法を破る者は、二、三人の証言に基づいて、情け容赦なく死刑に処せられます。
- ②⑨まして、神の子を足げにし、自分が聖なる者とされた契約の血を汚れたものと見なし、その上、恵みの霊を侮辱する者は、どれほど重い刑罰に値すると思えますか。
- ③⑩「復讐はわたしのすること、わたしが報復する」と言い、また、「主はその民を裁かれる」と言われた方を、私たちは知っています。
- ③⑪生ける神の手に落ちるのは、恐ろしいことです。
- ③⑫あなたがたは、光に照らされた後、苦しい大きな戦いによく耐えた初めのころのことを、思い出してください。
- ③⑬あざけられ、苦しめられて、見せ物にされたこともあり、このような目に遭った人たちの仲間となったこともありました。
- ③⑭実際、捕らえられた人たちと苦しみを共にしたし、また、自分をもっとすばらしい、いつまでも残るものを持っていると知っているので、財産を奪われても、喜んで耐え忍んだのです。
- ③⑮だから、自分の確信を捨ててはいけません。この確信には大きな報いがあります。
- ③⑯神の御心を行って約束されたものを受けるためには、忍耐が必要なのです。
- ③⑰「もう少しすると、来るべき方がおいでになる。遅れられることはない。わたしの正しい者は信仰によって生きる。もしひるむようなことがあれば、その者はわたしの心に適わない」
- しかし、私たちは、ひるんで滅びる者ではなく、信仰によって命を確保する者です。

今日の②節から後の部分ですが、この中で大きく何を言わんとしているのか考えてみますと、「あなたがたが主によって既に与えられている確信を投げ捨ててはいけません」ということを非常に強く訴えているのだと思います。²⁴⁰

今月に入ってから、私たちの周りでは色々なこと、大きな出来事がありました。その一つは、世界的な行事と言ったらよいでしょうか、世界的な規模で祭事が報道された「ダイアナ妃の葬儀」がありました。(1997年9月6日の出来事)

(マザー・テレサさんのこと)

そして丁度その日に、インドで「マザー・テレサが亡くなった」(1997年9月5日)という報道が平行して流されました。彼女の報道がなされている時に何人かの女性が「あの方も、本当にととう亡くなってしまわれたのね」と言っていました。その人たちの言葉の裏には、「良いことを一生懸命されたのだから、もうちょっと長生きさせて頂いてもよかったですのではないかしら。」という残念な気持ちが少なくはなかったでしょう。奇蹟的に重い病気から立ち直って、良い働きを続けていらっしやった頃のことですから、今度もまたお働きを続けられるために、神が命を長らえさせてくださるだろうと考えたのです。

私たちは信仰において、これをあまり認めたりませんが、「どこか因果応報的なものの考え方」を秘めています。

ヨブ記を学んだ時にもそれを感じたのですが、今回のこの出来事にしても、やはりそのことを考えます。私たちが熱心に神にお仕えさえすれば、いつもそれ相応の御恵みを沢山頂けるだろうという、言い換えれば「自分たちが能動的に活動すれば、それに対応した御恵みが自動的に運ばれて来るだろう。」という、そのような発想があり、それも信仰の世界なのだと考えています。²⁴⁰

ところが、現実の信仰の世界とはそのようなものではなく、「神が能動的に働きかけられ、私たちは受動的にそれに応答しているに過ぎないのです。」だからマザー・テレサが亡くなったことも、彼女が神の御手の中に生かされていたという出来事の一環なのです。何をしようが、どうしようが、その瞬間に「おしまいっ、天寿!」と言われたら、誰の命だっておしまいになる。そのことが本当に受け止められていかねばならない。

それと同時に、歴史の中に、神の愛の新しい形を具現化する道を開かれた一人の姉妹が遺してくれたわざを、是非、自分たちのわざとして身の回りに生かしていかなければいけない、と考えるのが当然なのです。しかし、どうも私たちは限定をして「インドのカルカッタのあのところで、あのマザー・テレサがなした、あの運動だから素晴らしいことであって・・・」という考え方がそこから出て来る。特別な限定のわざだから、自分たちとの関連を考えることはあまりないようです。

(律法の物の見方、考え方)

そういう捕われた狭いものものの見方、自己認識に束縛された考え方が、実はここで言っている「律法」なのです。自分の世界を少しでも支えたり、位置づけたりするために少しでも有利と思われるのが『外からの保障』なのです。で、そのようなものを「律法」という言葉で呼んでいるわけです。私たちはそうした意味では(決して律法主義者ではないのですが、)結構、律法的な生き方をしています。

もう一つ、今日の箇所と共に考えておきたい部分は「キリストの贖いを信じるすべての人が救われるということと、終わりの日に主は（信仰者を含む）すべての人を『裁かれる』ということが、どう私たちの中で結びついているのだろうか」ということです。²⁴¹

（日本の仏教のこと）

いわゆる日本の仏教の中には「大乘仏教」と「小乗仏教」があって、大まかに言えば、「自分が一生懸命修行してゆけば救われるという、救いに対する方向づけのある一つの流れ」と、同時に「何もしなくて、南無阿陀仏とさえ唱えれば阿弥陀さんが来て救ってくれるという、もう一つの流れ」とがあります。

でも、修行したならば救われると考えている人に、「人間は最後に南無阿仏と言えれば救われるよ」といっても納得できない。そんならやりたいこと放題やり通して、最後の日に南無阿陀仏と言えればそれでよしというのは、いい加減な教えではないかと考える。すると「それは信心の生活ではないよ、宗教的な生き方ではないよ」と言う人々も出て来るわけです。

そのようなことを色々寄せ集めて考えてみますと、「イエスは、すべての人の罪責を担って赦し救ってくださったということと、終わりの日にもう一度裁くために来られるということとを、どう繋げておられるのか」という問題が出てきます。

（厳しい著者の言葉の始まり）

著者は、これまで、律法に対抗して、主の贖いの御愛を強く主張してきました。ところがこの最後の②節に来て、大変厳しい言葉で、「もし、わたしたちが真理の知識を受けた後にも、故意に罪を犯し続けるとすれば、罪のためのいけにえは、もはや残っていません。」と言い切っています。

平たく私たち流に言えば、「イエスの十字架の贖いを信じて救って頂きながら（つまり洗礼を授けて頂きながら）、故意に救われた者として生きていない（つまり聖霊冒瀆的な生き方を続けている）ならば、もう救われる可能性はないですよ」と断言しているのです。

²⁴²

そうすると、結局ここでは何を言っているのだろうか。救われたらこれもできる、あれもできるはずなのに、それが何もできていないお前は駄目だ（救いから漏れる）と言われていたのではないかと、というように悲観的に捉えてしまう人もいなくはありません。

ところがそんな悩みに対して、「イエスの御教え」、あるいは「弟子たちに語られた御言」などを拾い集めてゆきますと、おおよそこんなことが言えると思います。

「あなたがたは、神の御恵みによって既に救われている。救われた者は、内在する神の御霊(聖霊)に導かれることによって、贖われた者らしく生きることが可能になる。それは、キリストの愛を生きるように招かれているのと同じことだ。にも拘らず、その愛に生きようとせず、キリストの贖いは大したことはないという行動をわざととる者もある。」と。

私はよく教会の色々な集会で、「あなたがたがキリストによって救われた（洗礼を受けた）というのは、神から天国に行きの切符を貰ったのと同じことです。でも最期に天国に行く列車が来た時、その切符を手元からすべり落として持っていなかっただら、その列車に乗れないことになるのです。一度救われたからもう絶対に何があっても大丈夫だ、ということにはなりません。救われて天国行きの列車に確実に乗りたいたのだったら、『救われた者であることを手放さないように、誰にもわかるように生き続けること』が求められてい

るのですよ。それができなかつたなら「その切符は貰っていても、使えない切符になりますよ」とお話しているのです。

(終わりの日に目を向ける)

ですが、私たちは「裁き」とか、「終わりの日」における備えに対して、きちんと目を向けて生きることが少ないようです。「あなたがたは、繰り返し犠牲が献げられねばならないような『古い律法』(旧約)の中には、もう生きていません」と著者は言っています。本来は、犠牲なるキリストが献げられてから、もう一度罪を冒してしまつたら、そのための犠牲はもはや存在せず、裁きの時には永遠に救われないことになるのです。

ですが、主キリストは『唯一度の贖いを完成されることによって』、それを信じる者が誰でも天国に行かれる道を開いてくださったのです。(新約)。後は、「あなたがたがそれを生きているかどうか懸かかっており、主の御用意された道程を最期まで誠実に歩き通すように」と促されているのです。

キリストに背くとか、神の御言を足げにするとか、今日のところでは厳しい言葉も出て来ます。キリストに救われながら背いた者たちの行動は、ほとんど共通しています。先ずは「神の約束に対して疑いをもつ。そして、一旦疑い始めるときりがなくなります。そこから不信が生まれて来ます。サタンは非常に巧妙ですから、創世記に出て来るように、「本当に神はこう言いましたか？」という聞き返し方をする。そうすると愚かな人間は「ひょっとしてそうじゃないかもしれない」と考える。そうすると「食べてはいけない」ということが自分たちにとっては「神が意地悪をしているのだ」と捉えられる。だから「神がそんなことを仰るのは、きつととびっきり美味なものだからに違いない。よし、食べてやろう。」ということで食べてしまう。

このようにして、御言に従えなくなる。疑いから不信が生まれる。不信から何が生まれるか。それは不信仰、背信が生まれるのです。神が園の中を歩いて来られた時に、アダムたちは「私は裸だから出られません」と言った。もうそこでは「自分たちの論理が神の論理を席卷してしまっている」のを見ます。

「神様、あなたが何とたつて、私はこう考えるのだから、駄目ですよ」と言い張る。疑いという小さな不信が、やがては背信を生むという危険な流れを捉えながら、ヘブライの人々に向かって著者は語りかけています。

逆な言い方をすれば、「神を決して疑つてはいけないのだ」ということを言わんとしているわけです。そのようなことが今回のテキストの始めの方に出て来ます。②⑥節から③⑩節までのところに。

②⑥節から②⑨節、

ただ残っているのは、審判と敵対する者たちを焼き尽くす激しい火とを、恐れつつ待つことだけです。モーセの律法を破る者は、二、三人の証言に基づいて、情け容赦なく死刑に処せられます。

まして、神の子を足げにし、自分が聖なる者とされた契約の血を汚れたものと見なし、その上、恵みの霊を侮辱する者は、どれほど重い刑罰に値すると思いませんか。

大変きつい言葉で面々と書かれています。

大体②⑥節から②⑧節までは、神の真理を否定するありさまが記されています。

その次の②⑨節は「十字架の血潮を穢れたものとする」という意味で書かれています。

神の子を「足げにする」という表現には、「カタパテオー」という言葉が使われています。(カタ；強調、パテオー；塗る 一一塗りつぶす)との原意から、「踏みつぶす」、「なくしてしまう」という意味となります。神から与えられた恵みの御言を全く意味のないものに変えてしまう、神の救いの約束を全く無用なもの、無価値なものに変えてしまうこと、「そういうことをしている人間はもはや救われませんよ」と言っています。ここでは、モーセの律法において、二、三人の証言によって罪を犯した者を死刑に処すると律法が命じていることを引用していますが、旧約聖書の大事な思想の中には、「逃れの町」というものもあります。「罪を犯した者も救われる余地がある」ということなのです。ところがその逃れの町の規定には、「殊更に罪を犯した者、あるいは怨念を持ち続けた結果、人を殺した者は『逃れの町』に入ることはできない。」とあります。

過失によって人を殺してしまった場合には、神が創ってくださった人の命を自分が滅してしまっただけという神に対する責任はありますが、故意にそれをしようとしたわけではないから、一応預かり状態にしようというのが「逃れの町」の思想なのです。

ですから今の法律で言えば、実刑の判決が出ないで執行猶予がつくこと、それが逃れの町の発想なのです。ただ、逃れの町に受け入れられた人は、罪が無くなったのではなく、逃れの町にいる以上は「罪を犯した罪人」なのです。

更に、この著者の考え方によれば、「神を信じなかつたり、正しいと認めないことによって冒した罪であるならば、それは断じて赦されない『執行猶予はつかない実刑』なのだ」ということなのです。

私たちは、イエス・キリストがすべての人の罪責を担うために命を捨ててくださり贖ってくださったということを信じて、多くの人に宣べ伝えています。「神に対する罪」ということを知らないで冒した罪に対しては、執行猶予の身にしてくださる(悔い改めの時間をくださる)。しかし一度主を知り、主への信仰を公言しながら、後に、平気で主を否定したり裏切ったり、神の求める愛に生きることを拒んだりする者に対しては、執行猶予はつきません、裁かれるのです。

「裁き」というのは、私たちの信仰の中で「終わりの日の思想、終末という考え方の中で位置付けられていなければならない」のです。とかく私たちは色々なことで「信者と未信者とを区別」します。しかし私は、『裁きに関しては、信者と未信者との区別を余り付けたくない』のです。なぜなら、信者たちが、「イエスは愛の御方だから、最後には赦してくださるのだ、罪を冒しても大丈夫だよ」という甘い間違った考え方を自分たちの中で作り上げ、それで互いに満足してしまうことがありえますから・・・ 247

「パウロ」はそのような生き方をしなかったのです。「私は一生懸命この福音を宣べ伝え続けているが、そのことは、結果的に私自身が救われることの保障にはならない、場合によっては、人をつまづかせた罪に定められ、ゲヘナの火に投げ込まれるかもしれない。人に宣べ伝えながら、自らは滅びに至る者になるかもしれない。でも私はそんなことを恐れないで、『福音を宣べ伝えよと命じられたから』そうします。」と述べているのです。

言い換えれば、パウロの行為は、『自分が救われるための行為ではない』のです。なぜなら、彼は、既に神によって救われ赦されているからです。「もう私は救われた者であるから、救ってくださった御方の恵みや喜びを伝えるのが当然であって、それ以外の生き方が私の中にあるはずはない。それがもしも、神の御心に反したり、神の御顔の前に出過ぎたりした場合は、この私は滅ぼされるかもしれない。しかし私は、神の愛の高さ、深さ、広さによる御恵みを伝えずにはられない。」と言って伝道し続けていった。パウロのその確信が、もう一度、神によって私たちにも問われているのです。

「聖霊を穢す罪は赦されない」と聖書の中で言われているところがあります。(ルカによる福音書12章⑩節)「私たちは、神が与えてくださる御霊の御働きを軽んじたり、侮ったり、自分の僕であるかのように取り扱ってしまうなら、もはや神の御前に生き続けることはできなくなるだろう。」と。

このことを教会で語ろうとする際には、なかなか難しいケースがあるかもしれません。と言うのは、「すべてを赦し、すべてを恵み、あなたのすべてが神の御前で受け止められている」と語られているような教会では、『そのすべて』の中に、信じながらも、もし神を侮るような生き方、御霊の助けなしに今日が生きられるような高ぶりがあるならば、その人は赦しや愛の対象からは除外される、ということも語らねばならないからです。これはとても大変なことです。

私は色々な機会に多くの本を読むチャンスが与えられておりますが、あるとき、その中にメソジスト系の教会のグループが集まって「ウェスレーについて勉強しよう」という試みがなされました。

ジョン・ウェスレーは「キリスト者の完全」という本を書き、そこには「義認、聖化、栄化」ということが書かれているのですが、そこでは、「神によって義と認められ(義認)、聖霊によって全く聖められて罪を冒さない人間に変えられ(聖化)、やがてはキリストの御恵みによって栄光の体になる(栄化)、それが「私たちキリスト者が完全な者(100%、パーフェクト)になることだ、そうあらねばならぬ」という主張をしているではありません。

そこで一般的に捉えられているウェスレーの主張をもう少し丁寧に読んでいくと、私たちが見落としている問題がいくつかあるということに気がつくのです。例えばウェスレーの「キリスト者の完全」を読んで考えてゆく時、「何をもって完全と言っているのか」ということですが、先ずあなたがたが義認を受けてキリスト者になったということは、「キリストの完全に向って歩む方向づけが始まったことを意味する」ということを彼は言っているのです。

それは必ずしも中途半端なことではありません。それは、キリスト・イエスによって生かされ、その愛に満たされて生きてゆきたいとの高い志を与えられたということです。それがあなたを完全なものに近づけていくのです。「キリストの愛が動機になってあなたを突き動かしている限り、あなたはキリストの完全を志している者なのです。」

神が愛してくださるゆえ、その御愛に私たちも愛をもってお応えようと志してゆく時、私たちは完全なものに近づいてゆくのです。そして「その完全である神の御愛によって導か

れ、自分たちの歩みを日々少しでも前へ進めて行くなれば、やがて最期には、成熟した信仰に到達することができるだろう。それが『聖化、更に栄化の御恵みにあずかる行程』であり、即ち『キリスト者の完全』への道である。」とウエスレーは主張しているのです。

③①節、

「復讐はわたしのすること、わたしが報復する」と言い、また、「主はその民を裁かれる」と言われた方を、私たちは知っています。生ける神の手に落ちるのは、恐ろしいことです。

これは、「他ならぬ神が報復されるのだから、あなたがたの間で復讐し合ってははいけません。神が裁かれることを忘れ、自分たちで勝手に行動した場合は、あなたがたが神の裁きの対象になりかねませんよ。」と言っているわけです。有無を言わせぬ神の手に落ちて、「永遠に滅びることは本当に恐ろしいこと」と滅びの恐怖を著者は告げています。

では「滅びは、なぜ怖いのか」、それは、「私に注がれていたキリスト・イエスの愛、神の恵み、私を満たしてくださっていた御霊が働かれない、神様とはまったく無縁の世界へ墮とされてしまう、全く役立たない者に変えられてしまい、自分にとって神の御愛を無価値なものにしてしまう」ということで、そんなことはあってはならないことなのです。この著者はそんな思いを込めて、これ以降の言葉を書き綴ってゆきます。²⁵⁰

③②節 あなたがたは、光に照らされた後、苦しい大きな戦いによく耐えた初めのころのことを、思い出してください。

ここからは「信仰の戦いの勇者であった頃の自分たちをしっかりと思い起こしてください」という「訴え」に変わります。信仰は与えられたらそれで終わりなのではなく、それを保ち続け、用い続け、生かし続けることが大事なのだ。神が共にいてくださることを信じ続けるならば、いかなる逆境に立とうとも、不遇の中におとしめられようとも気にかけないで、そこにおいても愛の神が共にいてくださることを信じ、生き抜くことができるのです。

その決断においては、「周りは、」「皆は、」という言い訳的な枠組みは通用しません。これは、私たちにとっては厳しいことです。

確かに聖書は「(あなたにとって)時が良くても悪くても福音を宣べ伝えなさい」と命じています。時代が悪いからとか、皆が神を求めないからとか、宗教に対して色々な考え方が生まれて来てしまったから、などと述べて、今は伝道しにくいのだと言うのは、自己弁護に過ぎないのです。

皆が信じないのかどうかを裁くのは、裁き主は神ですから、神に任せればいいのであって、「宣べ伝えなさい」と命じられたあなたがたは、ただ宣べ伝えていけばいいのです。でも、それをやり通してゆく力を「神の御霊の導きによって」頂かなければ、誰にも実行はできません。なぜなら人間は、物事をしっかりとやり通してゆくだけの拠所を他には、持っていないからです。人間は土の塵で創られた存在に過ぎないのですから、元々粘り気もなければ、何か確乎たるものを持っているわけでもないのです。²⁵¹

その私たちが、神から憐れみを頂き、御霊の導きの中に生きるならば、全く違った質の者に変えられる。「神の愛によって私たちは造り変えられて行くのだ、練り上げられてゆくのだ。そのような恵みを本当に感じ取ることができなかつたならば、私たちはもはや屑になってしまう、土の塵である本来の姿に戻ってしまう。」そのようなことがここでは訴えられています。

③③④節

あざけられ、苦しめられて、見せ物にされたこともあり、このような目に遭った人たちの仲間となったこともありました。実際、捕らえられた人たちと苦しみを共にしたし、また、自分をもっと素晴らしい、いつまでも残るものを持っていると知っているのに、財産を奪われても喜んで耐え忍んだのです。

神がくださる永遠の命、神が所有しておられる一切のものを共有させて頂ける御恵みに生きていることを信じられるからこそ、この世の価値、富、名誉の上には便々とはしません。あなたがたは正にそのように生きて来ました。またそのように生きている人々を、祈りをもって励まし続けて来ました。信仰とはそのようなことなのです。

③⑤節、

だから、自分の確信を捨ててはいけません。この確信には大きな報いがあります。

ここで著者は、「報い」という言葉を使っています。「恩寵」と言った方がいいかもしれませんが、それをしっかり信じて、何が起ころうとひるまなないで、御言に従って生きて行くこと、律法にかじりついて生きて来たあなたがたが今や、キリストの御恵みの御言にすべてを託して生きるということこそが大事なのです。その道をしっかり忍耐強く生き抜いて行くことを求められています。

③⑥節、

神の御心を行って約束されたものを受けるためには、忍耐が必要なのです。

信仰は、キリスト・イエスから御愛を頂いたことを信じ、その御愛に生きるのが大切であると同時に、その御愛が完成される日を信じて生き続けることが大事なのです。私たちは忍耐強くやることがなかなかできないで、すぐに良い結果が出ることを期待します。特に旧約聖書において「神が与えてくださった約束」には、ほとんどと言っていいくらい「未完了過去」というテンス(時制)が使われています。

それは、「その事柄は既に始まっていて遂には成就するけれど、現在は完成に向かって流れている。終わりの日にそれは完成するが、それまでは待ち続け、担い続けることが求められている」と表現される箇所に用いられることが非常に多いのです。²⁵³

私たちは色々なことを、終わりの日にではなく、今すぐ、見たいと思います。今見て今信じられなかったら、どうして終わりの事柄に望みがかけられようか、などと言いますが、そうではないのです。

この著者もそうですが、「アブラハムの信仰」をすごく大事にしています。それはおおよそ二つの理由があります。

一つは、アブラハムという人間は、神の御言であれば行く先も、旅の行程も全く問うことをせず、「行け」と言われたから出かけていったという『完全な服従』。これこそが私たちの信仰なのだという意味で大事に捉えています。

二つ目は、『可能性が全く見えないことを信じ続けた』。そのことが信仰においては大事なのだと言おうとしています。

「あなたがこれから行って獲得する地を子孫に与えるから、その地に向かって旅立ちなさい」と神は言われるのですが、その時はまだ彼には子どもがいないのですから、子孫などいないわけです。不信の問題が心の中にもやもやと起こって来た時、神はアブラハムに命じられる「お前は今立って、目の前に見えている広い原野を西に東に南に北に自由に歩き廻りなさい。お前の歩き廻ったところは全部お前の子孫に与えよう」と。でもそう言われた時にも子どもがいなかった。更に神は「この砂漠の砂のようにお前の子孫を増やしてやる」とも言われた、でも彼は尚も、子どもがいない状態なのです。

しかし、アブラハムは神の言葉を信じてその原野を行き巡ったのです。夜、神は外に導かれて星を仰がせ、あの空の星のようにお前の子孫を増やしてやると言われた時にも、子どもはいなかった。やがて、彼が百歳に達した時、初めて、神から遣わされた人が来て、「来年の今頃（今日ではないのです）、お前に子どもが与えられる」と告げるのです。

「今」と言われたら、信じたかもしれません、与えられることがそこで分かるわけですから。けれどもアブラハムはそれでも信じた。そういう全く可能性の見えない、自分たちの常識ではそのようなことが起こるかどうかの可能性は限りなくゼロに近い、そのような現実に対しても「神の御言なのだから、そうなると信じて待ち続けた」のです。

ヘブライ人への手紙によれば「彼は忍耐を通した。それがアブラハムの信仰が義と認められた理由だったのです」と言っています。

私たちは待てない性格があります。早く見せてください、早く結論を出してください、早く早く・・・と。ところが、神が早く結論をお出しになっていたら、おそらく私は救われなかったらと思うています。それが分かった時、『神が待っていてくださる忍耐』が私の心の中に伝わって来たのです。そして、神が与えてくださるものを得るための忍耐を本当に持ち続けることは、とても大事なことだと思いました。²⁵⁵

③⑦③⑧節、

もう少しすると、来るべき方がお出でになる。遅れられることはない。わたしの正しい者は信仰によって生きる。もしひるむようなことがあれば、その者はわたしのところに適わない。

これは「ハバクク書2章」の言葉の引証です。

その御言は「神が今までになさった中で、私たちに示された信仰の応答において、御言通りに実施なさらなかったことがあったらどうか」そのことを思い起こさせます。神はイスラエルの民を呼び出し「わたしがあなたを選んだ」と言われた以上、お選びくださった責任を様々な形で担い続け、果たしてくださったではないか。あなたたちは何度も何度も約束を破ったのに、絶えずそれを償いながら御約束を守り通してくださったではないか。その御約束の堅い信頼性を辿ってみれば、神が為さったことは必ず成就すると分かるはずではないか。

「だからこそ、この信仰によって生きるのだと信じ通して生きてゆこうではないか。しっかりと神を信じる信仰を担い通して、終わりの日、主によって永遠の命に入ることがゆるされている、その恵みが完成することを目指して、ひたむきに今日を生き、明日を歩んでゆこうではないか」と著者は呼びかけるのです。

③9節

しかし、わたしたちは、ひるんで滅びる者ではなく、信仰によって命を確保する者です。

第10章までの結論が、ここに出て来るわけです。

私たちは今日という日を、死という滅びに向ってに生きるのではなく、神の御約束の永遠の命のために生きる。私たちは自力によってその命を得ようとするのではなく、信仰によってその命を得ようとしているのだ。即ち、「神の御約束」にすべてを委ねて、そこにすべての目標を置き、すべての望みをかけて生きてゆく、その時にこそ、私たちは朽ちることのない永遠の命の一端を、「今」この世においても味わうことがゆるされるのだ。

「ウェスレーの書いた書物の中にもそのようなことが出て来ます。

「そこでは完全な神の愛に従って生き、完全な神の愛を歩み抜いて、あなたがたが神の聖めを頂くならば、その聖めの御恵みによって、天国の喜びとその祝福を、今、生きているこの地上の礼拝において前味わいすることができるのだ。そのことこそが、聖められた者の何よりの証しなのだ。」と言っています。

つまり、「御霊の助けを頂いて、キリストの御愛に生きる信仰を明確にし、それを清らかに純粹に保つことにより、天国の喜びとその祝福を味わうことがゆるされる日を、共に迎えようではないか」という呼びかけがなされているのです。

これまではその意味で「新約的に、あるいは、旧約の律法に照らしながら」信仰の問題を考えて来ました。次の11章からは、その信仰が本当にあなたにとって喜びになり、私たちにとって幸いになり、永遠の命を立たしめるにはどういう生き方をしたらよいのか、それにはどういう神の出来事があったのかを、多少具体的に描いてゆこうとしています。

著者は、今までの多少難しい「律法との対比によって行われた新約的な信仰論」に対して、今度は「より具体的な実践的な信仰とは何か」の説明を始めて行くわけです。そのような意味で、今日のまとめとして、「この信仰に生きるのは、終わりの日に向けて生きることに意味があるという点を、もう一度確認する必要があったのだ」と思います。

私たちにとっては、今のこの時に喜びがあるかないかは、大事な問題ではなく、「終わりの時の喜びを<今>どう受け止めて生きているかが重要な問題なのだ」と語っているわけです。私たちの信仰人生の方向性が、いつでも「再び主の来たり給う日」に向けられていなければ意味を持たないのだ、ということをしっかり覚えておきたいと思います。

最初にちょっとマザー・テレサのことをお話したのですが、彼女が最初にインドに派遣されたのは、カトリックの制度の中での考えていくと「教育尼」として遣わされたのです。そこで本当にまだ見ていない地域の人々のために自分が仕えて行くことができるのを喜びと思い、インドにあるカトリックの学校の先生となり、やがてその校長になって、

そこで本当にまだ見ていない地域の人々のためにも自分が仕えて行くことができる日を夢見て、一所懸命に教育に従事した。ところがある日、自分が校長さんになって初めて暇ができたのでインドの街を歩いた時に、カルカッタの地域で今までとは全く違う階層の人たちに出会うわけです。

これが「カースト制度と呼ばれている身分制度の中の最下層民の人々」だったのです。彼女はその存在に初めて気づくわけです。

しかも彼女は、その制度の問題だけではなく、当時のインドの一般の人々の間に広がっていた、自分たちを清める状態におくためには、汚れたもの（重病人など）を側に置いてはいけない、という風習に対して激しい憤りを感じるのです。

死んだ人間というのは、インドの一般の社会においては汚れているのです。だから死にそうになると、自分の家が汚れては困りますから、病人を道路に持ち出すのです。家の中に置かないのです。それがインド一般社会の常識なのです。死にそんな人が皆、道路に捨て置いてある、その状態を見て、マザー・テレサは心の中に激しい悲しみと痛みを感じたのです。そして、道路に打ち捨てられている死にそんな人々を集めて「死者のための家」を造る、そのような仕事を始めたのです。

ところがカトリックの法皇庁では、「それは彼女をインドに派遣させた目的に添わないから認めない、それはキリスト教の業、教会の業ではない」と言うのです。ましてや死にそんな人を丁寧に面倒見て、最期に「あなたはどのような葬式をしてほしいですか」と聞くと、その人はその地域の方法で葬式をやってほしいと言うわけですから、伝道にもならない、宣教にもならないというわけで、全然認められない。あれは私たちカトリックには関係ないことだからと言われますし、多くのインド人からも忌み嫌われるわけです。

「死者のための家」あそこは汚れた家なのだ、汚れた者に仕えているから、あの人も汚れているのだと。そういう風習の中で彼女は「私は最も下層の奴隷です」ということがインドの人々に分かるようにと、自分の頭の被り物に三本の線を入れたのです。それは「私は最下層の存在です」を表わしている<印>なのです。そうやって彼女が生きていて、だんだん社会的な評判が高くなって来たので、カトリック教会は彼女を改めて派遣し直し、「教育尼」から「労働尼」に移すわけです。一応面子を立てるためにそうしたわけですがけれども、そのような形で、再びカトリックの教会は彼女を受け入れたわけです。一度はあんな働きは教会には関係ないと切り捨てたのに・・・。

終わりの裁きの日、イエスはすべての人のために十字架によってその罪責を贖ってくださったとすれば、「その贖いの恵みを知らされないで死んでいった人々に対して、私たちキリスト者は申し開きができるのか」というのがマザー・テレサの深慮なのです。そして日本に講演にいらっしゃった時に仰った有名な言葉があります。

「わざわざ私のしている仕事を手伝いたくてインドのカルカッタにまでみえるのだったら、それだけの費用とそれだけの時間を、あなたの隣に存在するカルカッタ、あなたのカルカッタに使いなさい」と。言い換えれば、「あなたがたは、疎外され無視されている人が隣にいる世界で、その人の命の大切さを復元するための現実に生きていないじゃありませんか。インドまでわざわざ来なくても、日本にはそのような仕事は一杯ありますよ」と

彼女は指摘したのですが、どうもそのことをきちんと理解してくれた人は少なかったようでした。260

そのような色々な事柄を通して考えてみた時に、とかく私たちは、マザー・テレサという人はどういう人物だったかを考えるよりも、どんな事業を行ったかということで評価することが非常に多いことに気づくのです。インドで大変良い慈善活動をしました。だからあの人は偉かったのですと。

そうではなく、自分の身分が剥奪されようとも、キリストの御愛を生きようとしたところに彼女の生きる意味、生きる価値があったのです。が、あまりそのようには受け止められていないようです。私たちは「世の中で評価されるものの見方や考え方を、私たち自身のものの見方や考え方にたっぴり移入して生きていることが多い」と思います。それは、キリストの福音に相応しくないことだ、と聖書は言っています。今日のヘブライ人への手紙はその辺を厳しく質しているのです。

「キリスト御自身がそこで生かされないようなものの見方や考え方、判断基準であるならば、それはキリストの御恵みを足げにしていることなのだ」と著者は言います。私たちはこの言葉を胸の中にしっかりと留めて歩いて行かなければいけません。あるいは、そのような理念の教会を建て上げて行かなければいけないと思います。この箇所を読んで、私はしみじみとそのことを感じました。

10章まではある意味では難しい箇所だったのですが、その中からもう一度、「律法とは何なのか」を考えると、「決して外から与えられるものではなく、『自分が自分のために自分を有利にするために築き上げるもの』、それが『律法』であることが圧倒的に多い」と知るのでした。

「そういう律法は、他者を裁くためのものであり、自らを義と認めるためであるしかないことを覚え、そんなものに頼らないで、キリストの御愛に頼る以外、神の御前に生きる道はありません」ということを著者は語ってくれているのです。それで次の11章の「信仰とは」という学びの中で、この問題が非常に具体的な形で示されていることを期待しながら、更に次回、私たちの学びを進めて行きたいと思います。

(1997年9月13日)

< 写者あとがき >

今回も再三の推敲をして頂き、私に理解し易くしてくださいました。その森容子先生宛の私信を「あとがき」と致します。

森容子先生

主のみ名を讃美いたします。

再度のご推敲有難うございます。

きめ細かいご指導、読み手にわかってもらおうとする熱意の籠った愛のわぎに頭を垂れます。重なる再校正の度に自分の甘さ、全く先生に頼り切ると言うより甘え放しに気づき、穴に逃げ出したいくなります。第20回の仕上げが遅れましたのは、その過程で胸を裂かれる感情が出てきましたからです。「赦されるか。私のカタパテオー」と。

受洗を授かり学生時代の熱心な教会生活の後、社会人になり50年に及ぶ怠慢な信仰生活、自分の都合に合わせた教会生活を思い起こしながら、第20回に直面しております。

私の聖書の読み方の反省、全くお恥ずかしいというところではありません。

このヘブライ人への手紙にしても、歴史のある一時期、特定の人々への手紙としてしか読んでいなかった自分があります。松山幸生先生のこの説き明かしを通して「我が事」として響いてきました。晩年の松山先生の説教が私に迫ってきたように、更に深く、裁きの前におののかざるをえない自分をみえています。

②6節から③1節を読むともはや私には救いの回復は絶望的です。「私のカタパテオー！」

松山先生は20回の冒頭に今回の主たるメッセージを要約してくださっています。

「あなたがたが主によって既に与えられている確信を投げ捨ててはいけません」と。

③5節では「自分の確信」となっていますが、「与えられている確信」という言葉に一縷の望みをかけていいのでしょうか。

次に「キリストの贖いを信じるすべての人が救われることと、終わりの日に主は（信仰者を含む）すべての人を裁かれるということがどうあなたの中で結びついているか」と。

「あなたは神の御恵みによって、既に救われている、救われた者は、内在する神の聖霊によって導かれることによって、贖われた者らしく生きることが可能になる。それはキリストの愛を生きるように招かれているのと同じだ。にもかかわらず、愛を生きることができない。天国行きの切符を貰っているのに失ってしまったら、天国行きの列車が来た時には乗れない。失われた切符を探し出せば有効になるのだろうか。そうだ、とにかく、探し出そう。神様どうか、それを有効にしてくださいように。」

③2節からの著者の言葉に少し光が見えてくるようだ。洗礼を受けた時、心は燃えていたのではないかと思出す。世間に溶け込めず苦しんだことも多々あった。そんな時祈ったこともあった。苦しむ友に寄り添ったこともあった。頂いた確信をもう一度思い出しなさい。神様の忍耐にもう一度希望を持ちなさい。神様は私が何度も何度も約束を破ったのに、絶えずそれを償いながら御約束を守り通してくださった。その通りです。「その御約束の堅い信頼性を思ってみれば、神がなさったことは必ず成就する」

思い煩いに止まり続けず、礼拝に励む。無心で励む。「ひるんで滅びる者ではなく、信仰によって命を確保する者」になりたい。そう思い受難週を迎えます。

2023年3月31日

小原靖夫。

以上をあとがきに代えて記しました。

これを書いていた折に先生からまたまたお励ましのメールを頂きました。

有難うございます。先生は私をすべておみ通しなさってくださいっております。感謝いたします。

今できること、礼拝、聖書研究、祈祷会に励むこと。「与えられている確信」を確信することを目指します。